

荒俣宏

不死鳥篇

帝都物語 詔 6

KADOKAWA NOVELS

魔人の復讐か!? 敗戦の衝撃により
帝都の封印が解かれ、怨霊がふきだした。
書下しサイキックノベル

角川



ガクカ パルズ

昭和六十一年七月二十五日初版発行

著者 荒俣宏 あらまたひろし

発行者 角川春樹

ていものがたり
帝都物語 6 ふしちようへん
不死鳥篇

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 株式会社多摩文庫

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二二三 振替東京三一九三〇八
〒〇三 電話 営業〇三―三三八八五二 編集〇三―三三八八五二









KADOKAWA NOVELS

帝都物語6

不死鳥篇

荒俣宏

怨うらみますまい 現う世しよを

龍りゅう都とに枯れ咲く 花ひ一ひと枝え――

目次

序 屍解仙しかいせん

13

卷一 解放された怨霊おんりよう

31

卷二 旅をする柩ひつぎ

55

卷三 再会の街

85

卷四 獄中の靈視者れいししゃ

130

卷五 路上の陰謀いんぼう

199

卷六 幻影を喚ぶ青年よ

216

カバー絵・口絵・本文イラスト／丸尾末広

前巻までのあらすじ

関東大震災により火の海となった東京は、奇蹟的に復興をとげた。力強い再建のシンボルとなったのは、東洋最初の地下鉄道建設計画であった。しかし、この事業に全力を傾ける早川徳次に妨害をしかける者がいた。魔人加藤保憲が放った式神たちである。早川はたびたびにわたる工事妨害のため苦境に立たされ、日本科学界が誇る鬼才寺田寅彦の助力をあおいだ。

寺田は式神が横行する浅草上野間の地下を突破する決め手として、大阪で完成したばかりの国産第一号ロボット「学天則」を利用する案を呈示する。

一方、東京を完璧に破壊しようと奸計をめぐらす加藤保憲は、地下鉄工事によって死滅する大地の龍に代わり、天の龍を駆りたてて宇宙的規模の災害を地球に惹起させる術を弄しはじめた。由佳理から産まれた運命の娘雪子は、月を停止させ地球の自転に影響を及ぼさせる「永遠の満月の方程式」を解こうとする。

だがこの危機を救ったのは、山深い会津相馬の倅、神社に仕える神女目方恵子であった。彼女は祭神平将門の夢告を受けて辰宮洋一郎の妻となり、加藤保憲に対決した。事態の変化を察知した加藤は攻撃目標を恵子に絞り、魔物の一群を差し向けた

が、恵子は地相占術家黒田茂丸とともに血路を開き、天龍を駆るといふ加藤の野望を喰い止めた。しかし彼女は加藤の術に破れ、大連へ連れ去られる。

昭和初期の復興ブームは十年を境に途絶え、暗い戦乱の時代が東京を包みこんだ。それでも昭和十一年が明けたとき、辰宮家を出て女給となった辰宮雪子は一人の青年将校に恋した。彼の名は中島莞爾といい、陸軍内部を牛耳る統制派に反旗をひるがえす青年将校の一人だった。ある夜雪子は、半ば冗談に、自分を不幸にした辰宮洋一郎なる大蔵省官吏を射殺してくれと頼んだ。だが中島はそれを笑って聞き流した。

そして二月二十六日未明、昭和維新を叫ぶ青年将校たちが元老重臣を殺害し帝都を占拠するという大事件が発生する。理論的指導者は北一輝。彼もまた超能力を持つ魔王であったが、平将門の霊を封じ切れず、二・二六事件は終結する。そして皮肉な運命は、反乱軍に加わった中島に恋する雪子の真の父洋一郎を射殺させる結果となった。

こうして時代は第二次大戦へ突き進んでいった――。

〈登場人物〉

鳴滝純一 理学士。故辰宮洋一郎の旧友で帝都破壊を阻止するため寺田寅彦、幸田露伴らと共に活躍した。終戦を鹿児島県坊津で迎えるが、ある日、不穏な動きと共に魔人加藤の再来を知る。

加藤保憲 帝都完全崩壊を策した怪人。将門の霊との闘いに敗れ、いったんは満州へと去ったが、中国の秘術により不老不死の屍解仙（仙人）となり、再度、帝都崩壊を企む。

辰宮由佳理 亡き洋一郎の妹。既に六十歳を越え、病いと共に終戦を迎えた。強度のヒステリー症状ないしは一種の霊能を有し、そのために奇怪な事件に巻き込まれたが、体の衰弱が激しい。

辰宮雪子 辰宮由佳理の娘。二・二六事件に深く関わったが、戦後は浜町の料亭で年老いた母をかか

え芸者として生きる。

辰宮恵子 東北にある佛神社の宮司の娘。魔人加藤を倒すため、故洋一郎の嫁として東京へ来たが、加藤に捕えられ中国で戦中をすごした。再び日本に戻ってくる。

李約瑟（ジョゼフ・ニードム） 英国大使館顧問。ケンブリッジ大学教授。中国の不老不死の秘薬・煉丹道と仙術の研究者。

大川周明 「コーラン」を指導書に、戦犯となった後も大東亜共栄圏の夢を捨て切れず、井上日召、北一輝と並んで宗教的熱狂につき動かされながら武力革命を画策し続けた霊的ファシスト。

鳥岡彌二郎 “富士の鶴”殺しの怪談に出てくる主人公。不死を得たものの鬼と化した。

角川源義 角川書店初代社長。国学院で折口信夫に学んだ新進国文学徒であったが、敗戦直後の荒廃に際し、日本文化を守りぬく決意をもって二十八歳で角川書店を創業。学者・俳人としても名をなした。

平岡公威ひらおかきみたけ 後の小説家、三島由紀夫みしまゆきお。大蔵省官吏かんり。
故洋一郎の恩給おんきゅうを届けるため辰宮家と係わる。

序 屍解仙

暑かった――。

八月のまったただ中。香港の雑然とした貧民街には、生きものの呼吸を停めてしまうほど重苦しい熱気がただよっていた。

しかもその熱気は、気体の集まりではなく、あきらかに固体――言い換えれば、手でさわることでできる質感をもった塊りなのだった。その重い熱気が小路や横丁を占領しつつくし、わずかに子供と野良犬だけが、地面に這いつくばるようにして熱気の間隙を動きまわるのを許していた。

だから、すでに天童の精妙な軽さを失っている大人たちは、粗末な家の中にぐったり横たわり、息を殺して夜のおとずれを待つしかなかった。

人間を射殺すかと思えるほど激しかった夏の太陽が、ようやく西に傾きだすと、貧民街の白壁や敷石に、じつとりと露が結びはじめた。花を活けた牛乳びんの底にも、無造作に放りだされた算盤のふちにも、水滴がたまりだす。

数日前までは轟いていた市街戦の銃声も、ようやく途切れたばかりだった。ただひたすら暑いば

かりの日は、一度か二度、中国の雜然とした貧民窟を訪れた。

人々は、長く辛かった闘いが本当に終わったものやら、信じようにも信じられなかった。わずかに、日本軍と日本人の姿が周囲の町から急速に消えたことだけが、確かな手応えといえたいえた。しかし、すべてが一夜にして逆転し、つい昨日までであった市街戦の再開に出喰わさないとかがざらなかった。だから、今は、だれもが死んだように休息をむさぼった。

そうするうちに気温がさらにさがりだし、大気をムツと覆っていた熱い蒸気が冷えて水滴になる量もふえてきた。おかげで貧民街の家の中は水をぶちまけたように濡れはじめる。それでも、貧民窟に巢食う人々に、立ち上がる気配は見えなかった。

いつのまにか、夏空に紫色の夕闇が兆したところだった。迷路のように曲りくねった露路をのぼってくる人影が二つあった。その人影は、貧民街の子供の群れとすれ違うたびに、足を停めて何ごとか問いかけようとする。しかし子供は、見も知らぬものにでも出喰わしたかのようにあとじさりし、一瞬間をおいたあと、ワッと逃げ散るのだ。

人影の一方は、大男だった。白いシャツに白い麻ズボン。淡い色をした髪が、夕闇の中で奇妙に輝きを発していた。たぶん、東洋人ではない。香港を根じろにしている英国人の一人らしかった。

この西洋人に付き添うもう一つの影は、小さくて黒っぽかった。貧民街の住民の事情に通じた中国人だろうか。おそらく、西洋人を案内して、この迷路へはいりこんできたのだろう。

西洋人は、両手を腰に置き、赤い燠火のようになった夕日へ目を向けた。あれほど固体化してい

た熱気も、今ではさすがに溶けだし、ポトリ、ポトリと雫をつくって液体に戻りかけていた。呼吸もだいぶん楽になった。

西洋人が立ち停まっている隙に、案内人らしい小さな人影は周囲の小屋をまわって、訪ね先を探した。ややあってから、人影が弾むような足取りで帰ってきた。

「李約瑟……」ふと、かすかなつぶやきが漏れた。大男を案内してきた瘦せぎすの人影が、あたりをはばかりるように漏らした声だった。

「李約瑟……大人！」

同じつぶやきが繰り返された。

どうやらそれは、西洋人に向けられた呼び声だったようだ。しかし西洋人は、李約瑟という中国名を聞きとれなかったらしい。

いや、もしかしたら、何かに気を取られるあまり、自分自身の中国名を一時的に忘れてしまったのかもしれない。

「ミスタ・ニーダム？」じれたような声が、すこし調子の高い英語に切りかわった。中国なまりの英語だった。男の呼吸が苦しうだった。どこかに熱気の残滓があつて、彼の心臓を引きつづき締めあげているのだろう。

「イエス？」ミスター・ニーダムと呼ばれた大男は、弾じかれたように答えた。そしてわずかに腰をかがめ、小さな人影の声に耳をかたむけた。